

〈言語〉派社会学

橋爪大三郎

〈言語〉派社会学は、理論社会学における、ひとつの立場である。のみならずそれは、ひとつの立場であることを越えて、あらゆる社会学が立脚すべき理論的な前提を与えるものである。なぜ、そのように主張できるのか？ それを理解するため、いったん、社会学の理論構成をめぐる問題設定の基本に立ちかえることにしよう。そのうえで、この立場をめぐる一連の論点を、順番に詳しくみていくことにしよう。

一 行為の集積としての社会

社会は、複数の人間がかたちづくる相互行為の秩序である。ただし、このことは、必ずしも意識されない。われわれ自身が社会に参入しており、日々そこで生活しているために、その実態がどのようなものであるかを改めて意識することは少ない。

日本中を揺るがせたオウム真理教事件をめぐる、活発な論議が繰り広げられている。地下鉄サリン事件から教団幹部の逮捕にいたる時期、風俗的な話題が世の関心を呼んだ。その狂騒が冷めた後、現代日本の精神状況を解説する知的な格闘が静かに始まっている。

「オウムが、あるいはオウムのなものが、私自身もそうである可能性を示している、という自覚なしには、このようなものを書くことはなかっただろう」。一九五八年生まれの社会学者、大沢真幸氏は近刊の『虚構の時代の果て』(ちくま新書)にこう記した。

オウムが抱いていたハルマゲドン思想のくだらなさを嘲笑(ちやうしやう)するのにはたやすい。だが、その「くだらなさ」が特殊でない多くの人の行動をとらえてしまった根拠にまでさかのぼれば、社会学的な分析に大切な意味が出てくる。



これまで指摘されている通り、大沢氏もオウムの思

想を終末イメージに彩られた七、八〇年代サブカルチャーのパロディーと見る。例えば、教団施設にあった空気清浄器と人気アニメ「宇宙戦艦ヤマト」に出てくる放射能除去装置の名前が同じ「コスモクリーナー」だったといった点を確認する。過去の新興宗教では、現実の否定、世界の破壊へて働きかけをやめる「ように変容し、やがて人間関係の不全をもたらした。その

にさかのぼり、救済へと直線的に発展する時間の流れ方を分析する。そして、その近代の論議を戦後日本に当てはめる。社会変革の理想が否定された後、なお理想の純化を目指せば、論理的に理想は自己否定され、虚構の肯定を招く。それが現実の否定、世界の破壊へとつながっていくというの

「イエスの方冊をはじめ、日本の新しい宗教に注目してきた。近著『オウム現象』の解説(筑摩書房)の中で同氏はオウム真理教は突然変異ではなく、ニュ

「オウムのムーブメントに位置付けられると書く。ニューエイジとは、新霊と「これをしてはいけない」という禁止を同時に示されると精神的に分裂する。専門用語でいうダブルバインド状況がアメリカと日本の間にあり、オウムもまた、この戦後の精神構造の中にあり、と橋爪氏は指摘する。教団が極端な反米主義だったことは記憶に新しい。

「オウム」生む社会を解説

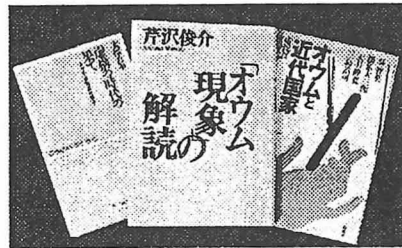
戦後日本の精神構造と連関

ウムの場合は不幸が何もないという空虚さが入信動機となっている。サブカルチャーのパロディーや空虚さの克服が現実の全否定へと暴走していったのはなぜなのか。

大沢氏は「近代」のルーツを古代ユダヤ教の一神教「オウムの現象」(筑摩書房)の中で同氏はオウム真理教は突然変異ではなく、ニュ

それ自体はむき出しのロジックだが、そこに冷戦の崩壊や自殺本の流行に見る「オウムの流れに合流していった」。日本の戦後五十年はこの「自分探し」が露出する過程だったという。社会学者、橋爪大三郎氏か。大沢氏は社会学的な考察、格闘の果てに「他者に對する徹底した寛容」という言葉をしぼりだしている。文化部 内田洋一

先に行われた「宗教と社会」学会では、オウムを生んだ神秘主義などの潮流が事件の後、衰退することなく、拡大していると報告された。若者たちの「身体や意識を束縛と感ずる感受性」(大沢氏)、それを乗り越えるための超能力への関心は、むしろ進行しているかに見える。オウムのものをいかにして超える



そうした社会のあり方を明確に意識し、科学的に考察するのが、理論社会学の役割である。

社会は、家族や都市や学校や職場や地域社会や法現象や芸術現象や医療現場から成り立っているので、社会をそうした部分領域に区画し、そのどれかひとつを研究することができる。それらは、家族社会学、都市社会学……といった、個別の社会学（「連字符」社会学）となる。この場合、おのおのの部分領域は、ほかのさまざまな部分領域が正常に機能していることを前提にして考察される。そのため、議論は大幅に単純化できる。しかしその代償として、結論は、われわれの常識をなぞるものになる。

これに対して、理論社会学は、さまざまな部分領域の相互連関を視野におさめ、社会の成立それ自身を考察する。そのため、議論は、もっとも基本的な前提から出発する。そして結論は、社会に関するわれわれの常識を、そうした基本前提にさかのぼって解体し、再編成するものになる。

これまでさまざまな学者によって練り上げられてきた、理論社会学の議論のすじ道を、簡単に以下、復習してみることにする。

1 行為とその接続

社会は、とりあえず、一人ひとりの人間の集まりである、と言える（ $\text{社会} \equiv \text{人々}$ ）。

しかしこれは、社会を、自立的な個人（主体）の集合と考える、近代のイデオロギーのストレートな反映にほかならない。自立的な個人そのものが、社会的に形成されるという側面を、この前提はおおい隠してしまう。

もう少し適切な出発点は、行為である。大部分の社会学者は、社会が行為から成り立っていると考えるこ

とに、同意している（ $\text{社会} \equiv \text{行為}$ ）。

そこで、さまざまな行為が集まって、そこに、どのような秩序を形成するのか？——これが、理論社会学の中心テーマとなる。

*

さまざまな行為のあいだの秩序は、ひとつには、個体のうえで生じる。

ひとりの人間を観察してみると、そこに、行為列（sequence of actions）をみいだすことができる。ある個体の身体の上で、つぎつぎに展開される行為が、行為列である。

行為列は、任意に並べかえられるものではなくて、内部にある秩序をもっている。これを仮に、統合構造（paradigme）とよぶことにする。行為の統合構造は、行為を展開している個体が、なんらかの内的構成（心的構造）を持っていることに対応する。

一つひとつの行為は、いちおう観察可能である。なぜなら行為は、「身体の観察可能な変化」からなるからである。行為列も、同じく観察可能である。

いっぽう、行為列の秩序（統合構造）は、そこにあるけれども、単に観察可能なものではない。統合構造は、行為列の内部構造であって、そこになんらかの仮説を設定しないとみえてこないし、実証できないものだからである。

*

もうひとつの行為秩序は、ある個体と別の個体のあいだで生じる。

ある人間がある行為をし、それがもうひとりの人間にそれとして受けとめられる。そこで、もうひとりの

人間がつぎの行為をし、それが今度は、もとの人間にそれとして受けとめられる。そこでふたたび、もとの人間が行為する。それを受けとめたもうひとりの人間が、ふたたび行為する。……

このように展開する一連の行為の布置は、あるひとりの人間のうえでだけ生じる場合と違って、自明なかたちで行為列をつくり出すわけではない。ある行為が、別の誰かに行為として受けとめられないかもしれない。たまたま人びとのあいだで行為の連鎖が観察できたとしても、それが、偶然ばらばらに生じたのでないことを確認しなければならない。

それでも、ある人間の行為とべつの人間の行為とのあいだには、秩序が存在する。これを仮に、連合構造(syntagme)とよんでおく。これは社会学で、伝統的に、分業とか相互行為とかよばれてきた。

*

行為は一般に、単独で存在するものではない。ほかの行為と関係しあって、緊密な秩序を形成している。どんな行為も、すでに生じた行為や、これから生起するであろう行為を前提にしている。そして、後続するほかの行為のなかで、その効力を確認されていくのである。

社会が成立しているとは、こうした行為の秩序が存在するということなのだ。

行為と行為の関係が、ある個体のうえで統合構造として実現しているにせよ、異なる個体のあいだで連合構造として実現しているにせよ、そこでは、行為の接続が問題になっている。

ひとつずつ生起していく行為が、それに先行するさまざまな行為やそれ以外の行為の拡がりのなかで、どんな位置を占め、どのように関係しあうか。そして、既存の行為秩序のなかに、どのように織り込まれていくか。新たに生じた行為が、既存の行為と有効に関係できることが、行為の接続である。

行為が接続する条件を明らかにすることが、行為秩序を考えるためにもっとも基本的である。これに比べると、行為がある人間のうえで展開していくか、人びとのあいだで展開していくかの違い(統合構造/連合構造)は、二義的な違いにすぎない。

2 行為と意味

行為というものの成り立ちについて、もう少し考えてみよう。

行為に関して、つぎの特徴が本質的である。

- (1) 行為は、互いに連関しあうことで、存立している(行為の相互依存性)
- (2) 行為には、それぞれ意味がそなわっている(行為の有意義性)
- (3) 行為の意味は、規則によって与えられる(行為の規則依存性)

第一の特徴(行為の相互依存性)は、どの行為も、それ以外のさまざまな行為と連関しあうことで、存立していることをいっている。たとえば「歩く」という行為は、「走る」ことや「立ち止まる」ことや「坐る」こととの対比において、ひとつの行為選択肢となっている。またたとえば、「売る」や「挨拶する」は、「買う」や「挨拶を返す」とペアにならなければ、成り立たないような行為である。またたとえば、「代議士に立候補する」は、「国会を解散する」や、「日本国憲法を公布する」といった行為(とその効果)を前提としなければ成り立たないような、階層的な連関のもとに置かれている。

この点で行為は、言語と似たところがある。

『一般言語学講義』にまとめられたソシュールの考察によると、言語は、対立しあう記号のシステムであって、どの言葉もそれ以外の言葉との差異(difference)によって存立している。そこには、差異と対立があるだけであって、個々の言葉のなかに積極的ななにかが実在しているわけではない。——ソシュールの提起したこの原理のうえに、二〇世紀の理論言語学が成立し、構造主義や記号論の系譜が發展した。

ソシュールの指摘は、言語が、カテゴリー(範疇)として存立していることと対応している。カテゴリーは、その素材である連続的な実体(言語の場合は、音)の、恣意的(arbitraire)な切断のうえに成り立っている。行為もまた、カテゴリーである。その証拠はいろいろある。たとえば、失行症(apraxia)。失行症の患者は、筋肉や感覚・運動神経には異常がないのに、大脳に損傷があるために、行為ができない。このことは、行為が大脳によってコントロールされていて、単なる筋運動とは異なるレヴェルの高次な活動であることを示している。構成失行という事例では、マッチを擦る、パジャマを着るといった、いわゆる構成行為(前後左右などの空間知覚や自分の身体図式を前提に行なうタイプの行為)ができなくなる。幼児も、ほかの単純な行為を習得したあと、こうしたタイプの行為をようやく習得する。このことから逆に、要素的な行為を集積した複合的な行為(内部に統合構造をそなえた行為)のあり方を推測することができる。

行為は、筋肉の運動として実現されるとしても、認知や意図のような、大脳の精神機能に依存している。行為と言語は、大脳の皮質の別々の場所に、それぞれ「機能部位」(もっぱらそれをコントロールする場所)を持っている(運動野と言語野)。ただそれは、両者がまったく無関係であるという意味ではない。言語もまた、行為の一種であり、その非常に重要な特殊場合である。そして、両者は並行し、互いに関連を持ちなが

ら高度なものに發展してきたのである。行為はカテゴリーとして存立する。その輪郭を際立たせ、それをより高度なものに統合していくために、言語を含む高度な精神機能はおおいに役立ったはずである。

もっとも、このことを論証するための、直接の証拠をあげるのはむずかしい。ひとつの傍証として、石器の進化をあげておこう。

フランスの人類学者A・ルロワグーランは、『身ぶりと言葉』のなかで、ごく初期の簡単な石器(石核石器)の段階から新石器時代にいたる、石器製作技術の發展について紹介している。初期の石器は、素材となる石塊にいくつかの方向から打撃を加え、成形された石核を石器として用いる。それが徐々に發展し、ある時期(彼のいう「象徴革命」の時期、いまから数万年前)を境に、石塊から打ち落とした薄片に系統的な打撃を加え、効率よく細石器を生産する技術として大發展する。この間、人間の身体能力に、特に大きな変化があったとは考えられない。石器を製作するには、決まった方向からの打撃、明瞭な目的意識、反復と修練などといった、高度な行為の統合構造が必要となる。それが、人間の言語能力・象徴能力の發展と並行して出現している事実が注目される。

*

第二の特徴(行為の有意味性)は、行為が、身体の挙動やその物理的な帰結に還元されないこと、むしろ、それがもたらす意味とともに行なわれ、受けとめられることをいっている。

マックス・ヴェーバーは、行為の意味理解を、社会学の中心的な課題に掲げた。行為が有意味であること、行為を研究するのにその意味の解明が欠かせないことは、ほとんどすべての社会学者の一致した見解となっている。

問題は、その先である。行為する本人にとっての意味(行為者の思念する意味)と、行為に関わる周囲の人物とが受けとる意味、さらに、行為を観察する第三者(研究者)の受けとる意味は、同一のものなのか？ 同一でないとするば、行為の意味の客観性や妥当性は、どうやって保証されるのか？ —— 悩ましいこの問題は、(それでも社会は営まれている、という事実を持ち出して)適当にやり過ごされるか、それとも、厳密な方法論(たとえば現象学)にもとづいて徹底的に議論されたあげく、結論の見えない迷路のなかに放置されるかしてきた。その結果、行為が接続することの基礎も、あいまいなままに放置されてきた。

ヴェーバーに始まるこの問いは、問いのスタイルが間違っている。

行為は、客観的な出来事である。それは、行為者にとっても、社会を生きる他の人びとにとっても、観察者にとっても、客観的に確実にそこにある。それに対して、行為の意味のほうは、人びとにばらばらにわけ持たれている。行為者、それ以外の人びと、観察者がめいめいばらばらに、行為の意味を理解し、決定する権利を持っている。—— こういう設定では、行為の意味が一般に一致せず、不確定になるのは当たり前である。

行為とその意味とを切り離して、別々の場所に存在するかのように想定するから、こういう結果になる。古典的な主観／客観図式によってものごとを記述し、行為は客観、意味は主観にふりわけるという想定そのものに問題がある。こういう想定のもとでは、社会現象は、主観／客観に引き裂かれた、掴みどころのない現象ということになってしまう。そもそも行為と意味は、切り離せるものなのか。

行為とその意味とは、同時に出現する。行為とその意味とは、切り離せないままそこにある。—— このような理解をもっとも明快に提示したのが、ソシュール、ヴェーバーから約半世紀あとの哲学者、L・ヴィト

ゲンシュタインである。

*

第三の特徴(行為の規則依存性)は、行為が規則(ルール)に従っていること、そしてその限りで、行為は意味ある存在となっているということである。

ヴィトゲンシュタインは、言語ゲーム(language game)のアイデアによって、行為とルールの関係を徹底的に考察した。そして、人間の行為一般を、規則に従った(rule following)ふるまいとして記述する道を開いた。

行為とルールの関係を、これ以上単純にできないかたちで示すのが、数列(sequence)である。数列は、行為列の最単純モデルであると考えてよい。

個々の行為は、個別的で具体的、すなわち有限である。それに対して、意味は、一般的で抽象的、すなわち無限である。—— このように両者を対比させると、さきの古典的な主観／客観図式に陥り、そのなかでものごとを考えなければならなくなってしまう。しかしほんとうにそうだろうか？ ヴィトゲンシュタインはここに疑問を抱いた。そして彼は、理念的な「意味」がどこかに実在すると仮定する必要はないことを示した。

数列とは、たとえば、

$$\{a_i\} = 2, 4, 6, 8, 10, \dots$$

(1)

のようである。私たちは、はじめのいくつかの項をみていくうちに、「わかった!」とひらめき、この数列の規則を理解する。いったん規則を理解してしまえば、数列のその先をいくらでも書き続けていくことができる。だから、いちいち書かずに、省略できる。「……」(以下同様)の部分は、その省略のしるし(つまり、「わかった!」というしるし)である。では、規則はどこにあるのか。まさしくここに、(1)式のかたちで目の前にある。規則を理解したとたんに、規則はこの数列のなかに実在しはじめる。この数列とはちがったところに、規則が実在するわけではない。

数列の一般項を記述する(右の(1)で言えば、一般項を $a_n = 2n$ と表記すること)は、本質的でない。一般項の意味するところを知るには、そこに含まれる n を解釈しなければならないが、それは $n = 1, 2, 3, 4, \dots$ で与えられよう。これは実のところ、(1)式と変わらない。要するに、仮に一般項によって、ある数列の「……」(以下同様)の部分を消去したようにみえたとしても、それはなしですむわけではないのである。

数列と同じように、行為列(sequence of actions)を

$$\{a_i\} = a_1, a_2, a_3, a_4, a_5, \dots$$

(2)

のように書いてみよう。この各項は、個々の行為をあらわす。個々の行為は、この行為列のメンバーであることによって、行為たりえている。すなわち、ある規則に従っており、そのことによってある意味を帯びたものとなる。たとえば、(2)が、サッカーのゲームだしよう。サッカーは、ボールをゴールに蹴りこむ、パスする、……などの行為から成り立っている。また、ボールを手で持って走る、などの行為は含まれない。

そうした一連の行為の集積のなかに、サッカーのルール(規則)が存している。それ以外のさまざまな行為(言語ゲーム)も、こうした構造をそなえている。

このように理解するなら、行為の集積としての社会は、また、言語ゲームの集積であるとも言えることがわかる。

枝葉にわたるが、いくつか注意しておく。まず、ヴィトゲンシュタインの言語ゲームのアイデアに対して、アメリカの哲学者クリプキが懐疑を投げかけた。有限の行為列はルールを一義的に確定しないのではないか、という懐疑がそれである。仔細に検討すると、この「クリプキの懐疑」は真剣に考慮するに値しないことがわかる。彼の懐疑は、ルールを行為列とは別に、理念的な存在と想定する伝統の枠内にある(紙幅の関係で、その論証は別の機会に譲る)。第二に、言語ゲームのルールは、有限の行為列のなかに見てとられるしかないとしても、それを記述する試みが不可能なわけではない。ある言語ゲームのルールを記述する作業は、もとの言語ゲームと区別できるもうひとつの、しかしもとの言語ゲームに関連した言語ゲームである。私は、この関係を、複言語ゲームとして概念化した(橋爪、一九八五)。

行為列によって表現されるルールは、行為者からも、それを受けとめる人びとからも、行為を観察する第三者からも、一様に手のとどく場所(いわば、等距離)にある。行為の意味(規則)は、特定の誰かの内面に、特権的に帰属するのではないのである。

二 間身体的作用としての言語

さて、ここまで、行為とその意味について考察してきた。それでは、行為の特殊ケースである、言語とその意味についてどう考えるべきであろうか。

1 言語と意味

言語を、行為として特徴づけてみよう。

行為はすべて、規則に従っている。そしてその限りで、意味をもつ。行為の意味とはまず、個々の行為（身体の挙動）が、行為列のなかで負荷されることになる、行為列全体に対する関係のことである。行為列はさらに、互いに複雑な位置関係に置かれているので、個々の行為はそこから複雑な意味を受け取ることになる。

こうした場合、行為とその意味とは同時生成的である。行為するとは、その意味を理解しているということである。また、行為の意味を示そうとすれば、実際に行為するほかない。（たとえば、贈り物をする人は、友好の意を表しているわけである。また、友好の意を表そうとすれば、なにか行為をせざるをえない。）

これに対して、言語は、指示ないし意味作用 (signification) を内蔵している。

指示とは、“ここにない”ものを指し示す作用である。一般的に行為では、行為とその意味とが分離していない（行為の意味は、ここにある）ため、そこに指示作用が成立する余地がない。いっぽう言語の場合、言

葉の有限列（記号列）が、その外にある行為列（やその集積である社会ないし世界）と対応している。この対応が機能することが、指示作用である。

いま、この指示作用を、最も単純なモデルによって示してみよう。

$$\{l_i\} = l_1, l_2, l_3, l_4, l_5, \dots$$

(3)

$$\downarrow \quad \downarrow \quad \downarrow \quad \downarrow \quad \downarrow$$

$$\{a_i\} = a_1, a_2, a_3, a_4, a_5, \dots$$

(4)

ここで、 $l_1, l_2, l_3, \dots$ は、言語列 $\{l_i\}$ の成分。たとえば「メ」「テ」「クチ」……といった、個々の言葉である。いっぽう、 $a_1, a_2, a_3, \dots$ は、それに対応する行為。たとえば目や手や口に関わる、（一連の）行為である（目や手や口に関係する行為といっても、それは無数にありうるので、厳密を期すのなら、 $a_1, a_2, a_3, \dots$ はそれぞれが行為ではなく行為列であって、 $\{a_i\}$ は行為列の列である、と言ったほうが正確だろう）。 $\downarrow$ は、言語列の成分から行為列（の列）の成分に向かう、指示の関係を示している。指示の関係は、(3)と(4)とのあいだの対応関係のことである。

*

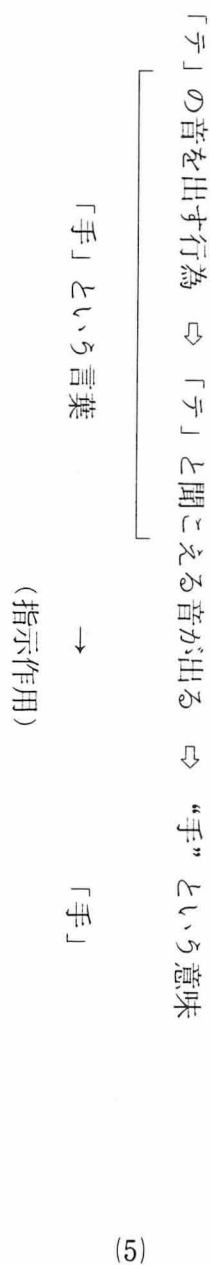
言語は、行為の一種である。けれども言語は、ほかの行為と違った、特別なあり方をしている。行為には、行為の意味がある。ほかの行為の場合、行為の意味は行為それ自身であり、行為そのものと区別されない。それに対して、言語の場合、その意味は、その指示作用のことである。

たとえば誰かが、「テ」という言葉をしゃべっているとしよう。「テ」という言葉は、くちびるや舌や喉などの調音器官をしかるべく調節して発声する行為である。それは、それ以外の言葉（「メ」や「クチ」や……）と区別があるから、「テ」である。「テ」という言葉をしゃべる行為は、そのものとしてみれば、それ以上でも以下でもない。その行為の（直接の）意味は、「テ」と聞こえる音を出すこと、である（この限りでは、行為の意味はまだ、その行為とともにある）。

しかし、言葉の不思議なところは、「テ」と聞こえる音が、ただちに「手」という意味をもつことである。これは、不思議なことだが、さきほどの対応関係によってそうなる。この対応関係（指示作用）を前提にして、最初から「手」を意味するために、「テ」と聞こえる音を出す——このようなメタ・レベルの構造を、「手」という言葉はそなえている。

*

言葉の意味作用は、二重の連絡が複合したところに成立している。



まず、(1)最初の連絡(⇨)は、ある人間が、一連の発音行為（「テ」「メ」……など）を対立させることができ

ていることを示す。「テ」「メ」……などの発音行為は、互いに分節している。この分節は、それ自体としては意味をもたないが、世界の分節構造（行為の意味）をそこに投影し、反映させるための土台となる。

つぎに、(2)第二の連絡(⇨)は、「テ」という音を、「手」という意味に結びつける。「手」という意味は、「テ」という音によって切りわけられるまで、存在しなかった。存在しなかったとは言えなくても、少なくともその存在を客観的に示す方法がなかった。要するに、「テ」という言葉が指すものとして、「手」という意味が存在しはじめた。

この二つの連絡の複合として、指示作用(signification)が成立している。

ソシユールは記号の指示作用を、能記(signifiant)と所記(signifié)の結合として定式化した。そして、能記の実体は聴覚映像、所記の実体は概念であるとした。しかしそのように、（聴覚映像と概念が結合するという）神秘的な議論を組み立てる必要はない。ここで提案したいのは、それを(2)、(3)、(4)のように、一連の行為のあいだの関係として理解することだ。

言語の指示作用(⇨)は、つぎのように二重に成立している。まず、言葉をしゃべる人間の脳のなかで、「テ」と聞こえる音を出す行為と、「手」に関連する（一連の）行為とが結びつく。両者は、脳のなかで別々の場所（言語野と運動野）を占めているが、そのあいだに神経回路の連絡が生じる。言葉が意味をもつのは、このようにある人間の頭のなかに、言語の意味作用をになう機能がうまれることにはかならない。つぎに、言葉（をしゃべる行為）⇨その意味（にあたる行為）のつながりは、おおぜいの人びとの集合（社会）のなかで、慣習(custom)として成立する。言語の意味は、誰にとっても、勝手に決めることができず、すでに成立しているものを受け取るしかない。意味を成り立たせる精神機能は、各人の頭のなかでいとなまれるしかない

としても、そこでどのような意味が成立するかは、集合的に決定されているのだ。

2 言語と身体

言語のこうした性質を、もう少し踏み込んで検討してみよう。というのは、ここから、個人と社会の関係——社会学にとってもっとも基本的な問題——の、これまでと違ったまったく新しい見取りが見えてくるからである。

*

社会を構成している一人ひとりの人間は、身体(body)として存在している。

どんな存在も、物質的に存在している。だから人間も、物質的に存在している。そのあり方を、身体ということにする(人間以外の動物については、身体とよばないことにする)。行為は、身体の手動である。人間の精神活動は、身体のひとつの機能である。言語もまた、身体のそうした機能のひとつであることになる。

身体は、物質的存在である(筋肉や骨格や神経繊維や……のかたまりである)ので、ある人間の身体と別の人間の身体とは、互いに外在している。この点、石ころやコンクリートの塊と同じである。身体は、皮膚という界面によって境界づけられており、ある人間の身体が、別の人間の身体に接続していたり、めりこんでいたり、重なっていたりすることはない。

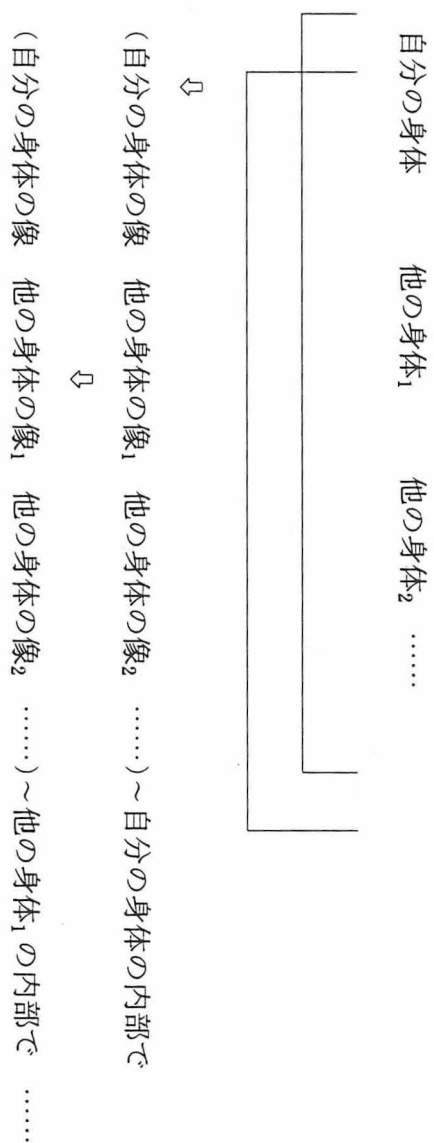
身体の特徴は、それが特別な仕方でも互いに関係しあうことである。

ある身体は、別な(いくつもの)身体の存在を認知する。その挙動を観察し、その行為を理解し、その身体についての像をかたちづくる。

身体は感覚・知覚器官をそなえている。そこから外界についての情報を受け取るわけだが、外界のなかには、他の身体も含まれている。身体の手動である皮膚は、外から眺めた場合に、身体の外形(の像)を与える。(これは、自分で自分の身体を眺めた場合も、他の身体を眺めた場合も同じである。身体を内側から眺めることはできない。)身体の外形の像は、どこに結ばれるかと言えば、それは、(眺めるという動作を行なった)身体の手動である。身体の手動機能のなかに、他の身体の手動の像が結ばれるのである。

このように、他の身体(の像)が、自分の身体の手動に繰り込まれるのだが、こうしたことは自分の身体だけではなく、他の身体でもまったく同様のことが起こる。この点で、自分の身体と他の身体とは、対称的(symmetric)である。

以上の関係を、図式的に示してみると、つぎのようである。



(6)

この関係は、かつて私が、「ダブル・リアリティ」としてのべたものである(橋爪、一九九三、一一二九頁)。

*

さて、身体を、行為や言語にそくして記述するならば、つぎのように定式化できるだろう。

$$\text{身体} = \left[\begin{array}{l} \text{行為列 } \{a_i\} : a_1, a_2, a_3, a_4, a_5, \dots \\ \text{言語列 } \{l_i\} : l_1, l_2, l_3, l_4, l_5, \dots \end{array} \right] \quad (7)$$

人間は誰しも、休むことなく、行為をし続け、言葉をしゃべり続ける。すなわち一人ひとりの人間は、その上で行為列と言語列とが展開するところの、身体である。行為列は、それ自体として意味をもっている。そのうえ、言語列とも対応している。そのため、行為の意味は、言語のなかにその表現をみつけることができる。言語列と行為列とが対応関係にあるので、言語と行為は、より豊かな、より高度な内部構造をもつように、互いを刺戟しあう。

ここで重要なのは、行為や言語が、もっぱらあるひとつの身体のみに属するというのではなく、必ずいくつかの身体にまたがって、間身体的(inter-corporal)に存在することである。

たとえば、ある行為列 $a_1, a_2, a_3, a_4, a_5, \dots$ を考えてみよう。行為は、観察できる身体の外形的な挙動である。したがって、この行為列の諸行為は、行為する当事者(行為する当の身体)に対してはもちろんの

こと、それ以外の人びと(任意の身体)に対しても原理上、同様に開かれている。同じことが、言語列(の成分である言葉)に関しても言える。

ヴィトゲンシュタインはかつて、「私的言語(private language)は不可能である」と結論した。その言わんとするところを、身体との関連で言いなおすならば、こうである。——行為や言葉は、そもそも、ある単独の身体だけに属するものだと考えられない。なぜなら行為も言葉も、身体の挙動にはかならないのであって、それは他者(他の身体)から観察でき、他者(他の身体)に受けとめられ、理解されることによって、はじめてその効力を生み出すものだからだ。行為や言葉は、隠れようもなく公然と、身体と身体との間で営まれる。私的に——身体の外からはどうしても接近できない、隠れた場所で——営まれると称される言語や行為は、そもそも言語や行為たりえないのである。(反例として、内言があると言いかもしれない。内言とは、口から実際には言葉に出さずに、頭のなかで、自分に言葉で語りかけることである。内言は、誰でも経験することなので、ヴィトゲンシュタインもそのことを考慮しなかったとは考えられない。ということは、ヴィトゲンシュタインは内言を、反例にならないと考えた。すなわち内言は、ふつうの言語があるからこそ可能な、派生的な現象であって、言葉を口に出して言うということがそもそもなければ、内言は不可能である、つまり、私的言語の反例にはならないと考えたのに違いない。)以上の議論を敷衍するなら、言語に限らず行為についても、「私的行為は不可能である」と言うことができる。

*

私的言語や私的行為が不可能であるという主張は、どこが重要なのか？

この主張が重要なのは、身体や社会をめぐるこれまでのものの見方——主体／客体の図式——が、誤りだ

と指摘できるからだ。

「社会は、人間個々人の集まりであり、人間は、独立自存した主体である。」こうした前提によって、法学も、経済学も、哲学も社会学も、あらゆる近代の学が組み立てられていた。よく考えてみると、こうした前提は、形而上学的な言明であって、根拠がない。

最近では、M・フーコーの仕事に影響された人びとが、しきりに、主体が歴史的に構成されてきたものにすぎないことを説いたり、近代の前提がひとつの制度にすぎないことを暴き出そうとしたりしている。なるほど、そうした指摘は、実証的に裏づけることができるかもしれない。しかし主体が、当初からある実体ではなく、派生的に形成されたものだとしたら、何がいったい当初から存在するのだろうか？ それを積極的に主張する議論は見当たらない。いまは、常識的な近代の図式に従って議論するほど単純なものの見方はもはやできないが、かと言って、それに代わる理論が見つからないという、中途半端な時期なのだ。

常識的な近代の図式によれば、身体は主体の台座である。主体(主観 subject)は、身体の外側からうかがい知ることのできないもの(私秘的なもの)として、めいめいに営まれると信じられた。主体のなかに、意識や、意図や、意味や、感覚や、欲求や、意志や、そのほか主体を構成するもろもろのものがある。そして、言葉や行為は、主体の「思念された意味」が外化され、表現されたものだと考えられた。逆に言えば、言葉や行為をあらわさなくても、「思念された意味」も主体も存在しうると考えられたのだ。

主体が実在すると考えるならば、意味も、意図も、主体ごとに、身体の内部に秘匿されて存在することになる。とすれば、それらは、行為や言語に外化されるとしても、一致が約束されないまま、平行線にとどま

ろう。つまり、客観の成立も、社会の成立も保証されなくなる。

ヴィトゲンシュタインのいう「私的言語の不可能性」は、そうした私秘的な主体が実体として存在することを否定する。身体はたしかに実在するだろう。行為も言葉も実在するかもしれない。しかし、身体の内にはなにも秘匿されてはいない。そこに主体が実在するように見えたとしたら、それは、言葉や行為が身体と身体とを結びつけることの効果にはかならないのだ。もっとも私秘的にみえる、感覚という現象に関してすら、ヴィトゲンシュタインは、「痛いから「痛い」と言うのでない、「痛い」と言うから痛いのだ」とのべている。

言葉や行為は、身体の内部に隠れている主体の、意図や意味を表現するための手段ではない。そうではなくて、言葉や行為こそが、(社会を生きる当事者にとっても、社会を観察する研究者にとっても)第一義的に存在する当のものである。ある身体の挙動である言葉や行為は、いつでも、ほかの身体にさらされている。その意味で、言葉や行為は、身体と身体の間にある。

3 言語と行為

身体と身体とを具体的に関連づけ、そこに社会関係を成立させるのは、言語、ならびに行為である。この両者(言語と行為)は、社会の根拠である。

右のような事実認識から出発する理論的立場が、〈言語〉派社会学である。ここで〈言語〉と表記するのは、「言語ならびに行為」を簡略化したものである。(もしも、フーコーの企図を引き受けて、主体の形成を積極的に語るのであれば、〈言語〉から出発するべきだろう。)

〈言語〉は、身体を始点とし身体を終点とする（身体ぬきでは存在できない）が、身体から相対的に独立している。それは〈言語〉が、形式(form)として存在するからである。〈言語〉は、社会という場のなかを、波動のようにいたるところ満ちたしている。新たにやってきた身体は、この波動（形式の洗礼）を受けて、“初期化”され、〈言語〉に応答しはじめる。このように〈言語〉は、身体に対して、あるタイプの形式を刻みこむ規範(norm)として作用する（このあたりの詳しい論述は、橋爪、一九九三をみてほしい）。

*

こうした〈言語〉と身体ダイナミズムを、これまでの社会学は、十分に見つめてこなかった。

たとえば、T・パソンズの社会化(socialization)の理論。この議論の場合、いっぽうで主体(個々の人間)が、もういっぽうで客体(社会構造なり文化なり社会規範なりのマクロ的な社会状態)が、実体として存在することがまず想定される。そのうえで、客体(社会)から主体(個人)に向かって、一方的な作用がはたらく。パソンズの採用したシステム論本来の発想にもとづくなら、主体が逆に社会の客観的な構造を形成するロジックも究明されなければならないはずだが、パソンズはそのロジックを欠いているので、主体は固定的な社会構造に適応するだけの存在(せいぜい、社会規範から逸脱することができただけの存在)として描かれてしまった。

七〇年代以降、社会学のいわゆる意味学派が続出したのは、パソンズの社会化の理論のなかで、主体としての人間があまりに貧相、かつ無内容に描かれていたせいだった。

もっとも、だからと言って、意味学派がパソンズより先の地点まで進んだわけではない。意味学派は、客観的でマクロな社会構造に最小限の関心しか払わず、社会構造との相互作用を不問に付すという代償を払

って、主体(個人)の意味世界を“記述”しているにすぎないから。

要するにパソンズの社会化理論と意味学派とは、あたかも背中合わせの二重体児のように、主/客図式にもとづく理論構成の限界を示している。主体(個人)を実体視し、客体(社会)を実体視して、両者の関係を考えようとした場合、客体(主体)について具体的な仮定をおけばおくほど、もういっぽうの主体(客体)の内容はそのぶんだけ空虚なものとならざるをえない。そして結局のところ、そのいっぽうに社会の実質があらじめそなわっていて、もういっぽうに流出しつつその空虚を満たしていく、という理論構成になる。そして、そんな流出のプロセスは実在しないのである。

主体も、パソンズが信じた社会構造も、社会のなかで結ばれがちな虚像である。そうした虚像を結ばせるのは、身体のあいだを不断に交錯している〈言語〉なのだ。（身体に規範として作用する〈言語〉は、けっして“主体を社会化”しているわけではない。）主体や社会構造のかわりに、社会現象のそれ以上さかのぼれない出発点となるのは、身体。そして、言語、ならびに行為なのである。

*

さて、こうした言語と行為のダイナミズムは、果してあますところなく社会現象を覆いつくすのであろうか。

さきにわれわれは、言語と行為の並行関係を想定した(3)、(4)。この並行関係がもっとも厳密に成立するとし、さらに、この世界(この社会)が行為(のみ)によって成り立っていると仮定すると、つぎの命題が成立する。

社会(を構成する行為連関は、かならず言語のなかに、その表現をもつ。

(8)

この命題を、表現定理(expression theorem)とよぶことにする。

よく考えてみるならば、表現定理は、社会学にとってもっとも根本的な命題である。なぜなら、社会学はそもそも、言語によって構成される。したがって、表現定理が成り立たない場合、社会学による社会の記述・分析が不完全となることを覚悟しなければならなくなるからである。

表現定理(8)の成否は、①社会は行為の集積なのかどうか、そして、②行為は必ず、言語のなかにその表現をもつのかどうか、の二点に依存している。

表現定理との関連で、ヴィトゲンシュタインの仕事を見直してみよう。

前期の著作『論理哲学論考』の末尾で、彼は『語りえぬこと』については、沈黙せねばならぬ』とのべた。この命題は、ふた通りに解釈できる。第一は、『語りえぬこと』(＝言語のなかに表現をもたない社会的な出来事)が存在し、それについては語ることができない(だから沈黙するしかない)、というもの。第二は、『語りえぬこと』など実はないのだが、それがあのようにみえるのは、言葉の用法の誤りによる(だから沈黙したほうがよい)というもの。ヴィトゲンシュタインは、第一の意味のことを言いたかったのだ、と思う。『論理哲学論考』を書いていた当時、彼は、世界はさまざまな出来事の総体であり、それらが言語のなかにそれぞれ表現をもつ(世界の出来事はすべて表現可能である)と考えた。この見方(いわゆる写像理論)は、エレガントで明快だが、出来事と言語との対応(写像関係)がなぜ成立するのか、説明されない謎となっている。もっと厄介なのは、身体(特にヴィトゲンシュタイン自身の身体)が世界のなかの出来事なのかどうかという点。

もしも彼の身体が世界のなかの出来事なら、それを外から眺め、言葉にうつしかえ、表現するのは、彼(の思考)ではなくてになってしまう。そこでヴィトゲンシュタインは、彼の身体は世界に属さないとした。(だからこそ、彼は、世界を彼の視野と等置する。)となれば、彼の実存的苦悩や、さまざまな思い(気分)は、世界のなかの出来事として語ることができなくなる。つまり、それについては『沈黙せねばならぬ』ことになった。

後期、言語ゲームの議論に転じたヴィトゲンシュタインは、世界はさまざまな(出来事ではなしに)行為(もしくは言語ゲーム)の総体である、と考えるようになった。その結果、いわゆる写像関係は崩れ去った(橋爪、一九八五)。出来事と言語は、まったく異なった二つの秩序であったが、行為と言語はそうでない。

言語は、行為の特殊場合である。すなわち、言語は行為に含まれるので、行為から言語への対応を考えると自己言及を生じてしまう。こうした設定のもとでは、表現定理は不完全にしか成立しなくなる。だが、別な面から言えば、この設定は、世界のなかに身体があることを当然の前提にできる。だから、語りうること／語りえぬことを、くっきり線引きする必要もなくなった。後期のヴィトゲンシュタインの議論においては、行為、言語、身体 of the three, 世界のなかで生じる出来事の相互関係として、はっきり見すえられている。言語ゲームの議論によって、行為、言語、身体の相互関係を、これまで以上に正確に記述できるようになった。行為、言語、身体 of the three, 相互関係を整理してみよう。

(i) 行為(ならびに言語)は、理解できる。

(ii) 行為(ならびに言語)は、言語に表現できる(ただし、その表現は完全ではなくて、理解によって補われなくてはならない)。

(iii) 理解は、身体にそなわる機能である。

(iv) 理解をはじめとする身体の内部のプロセスは、行為(ならびに言語)によって、間接的に含意される。身体のもともとの機能(活動)のうち、形式のかたちをとったのが、行為(ならびに言語)である。行為(ならびに言語)は、形式であるから、規則(ルール)に従っている。行為(ならびに言語)をやりとりするのに必要な能力が、理解である。理解は、行為(ならびに言語)と相関的に、身体にあらわれる能力である。

理解とは異なった機能として、感覚を考えてみよう。感覚、たとえば痛みは、痛みのふるまい(「痛い!」と叫ぶ言葉、痛みを表す表情、……)と密接に関連している。痛みが痛みとして成立するのは、痛みの感覚が痛みを表すふるまいによって切り出され、それ以外の感覚と区別されるからである。こうしたふるまいがなければ、痛みの感覚はそのほかの感覚と区別されず、ほんとうに「痛み」であるのかどうかはつきりしない、あいまいな興奮のかたまりであるにとどまる。そうしたアモルフな興奮は、たしかに行為(ならびに言語)に還元することのできない、身体の内部で生ずる事実(それ自身、語りえぬもの)であろう。そうした感覚は、それを表すふるまい(行為)によって切りわけられ、含意されることによってはじめて、客観的な社会関係のなかで意味をもちはじめなのだ。

感覚のほかにも、気分、感情、……といった、言葉にならないさまざまな身体内部のプロセスが存在する。それらは、行為(ならびに言語)の背後にあって、それを支える。行為(ならびに言語)は、それらを含意する。そういうかたちで、それらプロセスは、間接的に社会現象に参画するのだ。

このような間接的な関係まで視野に入れるならば、表現定理は、厳密には言えなくても、おおまかには

成立していると考えられる。すなわち、身体は、〈言語〉を媒介項として関係しあっているのだ、その相互連関の骨格にあたる部分を、言語のなかに表現できると考えられる。

三 〈言語〉・性・権力

身体と身体とが、〈言語〉を媒介項として関係しあっているのが確かだとしても、それ以外の可能性は考えられないだろうか。

〈言語〉とは異なった回路による関係として、私は、性、そして権力を想定することができると思う。この二つをつけ加えることで、社会をいっそう正確に記述・分析することができるとは思う。

1 性と権力

性は、身体と身体とが、〈言語〉を介在させないで、直接に関係しあうことである。

性現象を考えてみる。ある身体が別の身体を異性(性的対象)として認識する場合、まず、性別を表す身体的特徴(第二性徴)や社会的性徴(衣服や髪形など)が手がかりになる。後者は、特徴的な行為や記号(ある特定の意味をなうことが規約によって決まっている図像)が慣習的に性別を表すものである。すべての対人関係は、身体を互いに認知しあう必要上、多少なりとも性現象としての側面を含む。そのいっぽうの極には、まったく公然の、性愛表現の要素をまったく排除した関係があり、もういっぽうの極には、性愛表現へとできるだけ特化していく関係(性愛関係)がある。後者の場合、身体が互いの身体に照準して関係しあい、

いっぽうの身体内部のプロセス(性的興奮)が、もういっぽうの身体内部のプロセス(性的興奮)とリアルタイムに関連する(いわゆる性愛行為)。こうした行為を前提する公然の(正当化された)関係が、結婚(夫婦関係)である。

もうひとつの典型的な性関係は、母子関係である。すべての身体は、別なもうひとつの身体(母体)から“生まれる”ことで存在しはじめる。身体はその起源を、別な身体のなかに持っているのだ。この関係(生む/生まれるという関係)は、身体のこれ以上単純にしようのない直接的な関係、すなわち性の関係である。これらの関係を前提にして、家族(身体間の性関係を組織したもの)が営まれる。結婚や母子関係のような性の関係が普遍的であるから、家族もまた普遍的であるのだ。

社会は行為の集積であるという本論の出発点に照らすならば、行為のかたち(形式)を介在させない性現象は、社会の枠からはみ出している。性そのものは、社会に属さない。けれども、身体はそこにあり、身体内部のプロセスはそこにある。そこで、身体の挙動である行為は、あるいは性をうつつらと含意し、……、あるいは性を濃厚に含意とする。こうして並ぶ行為のスペクトルの極限に、ありありと性が実在する。すなわち、ある一群の行為は、性を前提にし、性を焦点にしたふるまいであって、性は社会の基礎となる力学を構成している。身体の至近距離では、〈言語〉とは独立な、性の力学が作用する。それは牽引力としてばかりでなく、反撥力として作用する場合もある。その場合には、性的なタブーとよばれる。(性現象についてのいっそう詳しい論述は、『性愛論』橋爪、一九九五で読むことができる)。

*

もうひとつ、〈言語〉を介在させない身体と身体との間の力学として、権力を考えることができる。

権力とは、行為に外側から作用する拘束的な力学である。

行為はもともと、行為する当人の自由であって、そのように行為することもできるし、行為しないこともできる。行為は、(行為しないことも含めて)行為選択肢からの選択である。選択の自由があることが、行為が行為であるための条件になっている(もしも選択の自由がなければ、それは自然的な因果法則に服することになり、行為、すなわち社会現象の枠からはみ出してしまう)。行為が本来従う制約は、行為がほかの行為と接続するための条件、すなわち、行為が行為であるための条件だけのはずである。

権力はこうした、本来あるべき行為選択の自由を拘束する、外的な力である。権力に服する人間は、本来そのように行為しえたにもかかわらず、そしてそのほうが本人には望ましかったにもかかわらず、そのように行為せず、別なふうに行う。われわれはしばしばこうした経験(権力による被作為体験)をするので、どの社会を生きる人びとも、権力についてのありありとしたイメージをもっている。

問題は、権力の拘束力の実態が何かということである。

権力という概念は、逆説的である。めいめいが行為を完全に自己決定すると考えると、そこに権力のはたらく余地がなくなってしまう。不本意(いやいや)であっても、行為は本人に選択されているはずであり、その限りで、本人は自発的に権力にしたがっている。逆に、権力が絶対的で、人びとの意思をどうにでも左右できると考えると、主体が行為を自己決定するという前提が成り立たなくなってしまう。

そこでこのように考えられよう。権力の拘束力は、人びとがさまざまな身体として集まって生きているという事実そのものに由来する。これを、行為連関の総体としてとらえ直してみよう。どんな行為も、いま行なわれようとするとき、それが行為としての効力をもつためには、それ以前に生起したいくつかの行為を前

提としなければならない。それら行為は、さらにほかの行為を前提とし、その総体を数えつくすことはできない。すなわち、そうした行為の連関は、いわばひとつの地平(過去の社会)を形成する。そして、動かしがたいものとして、現在の行為を拘束する。

こうした行為の連関は、意味的であると同時に、事実的である。意味的な行為のつながりは、〈言語〉として読み解いてゆける。いっぽう、事実にある行為のつながりのほうには、意味的にも因果的にも、必然の鎖をたどることができない。ある行為は、それを行なうも行なわないも、それを行なう本人の自由だったはずである。そして、その行為がすでに起こってしまったという事実は、とり返しがつかない。過去に行なった人びとの自由が事実として集積した結果、かえって、いま行為する人間の自由を限定することになる。

行為を取り巻くこのような、自由と拘束とが混じりあった状況を、自分の自発性(主体性)に属する部分と、それ以外の部分とに分割するとき、権力の像が結ばれる。権力は、行為のうち自分が支配し切れず、意味的な必然性(規則)にも因果的な必然性にも還元できない領域に与えられた名称である。

行為の意味的な必然を、〈言語〉が代表するとすれば、事実的な連関を、権力が代表する。権力は、行為に不可避免的に付随する、〈言語〉と相補的なもうひとつの様相なのだ(権力についての関連した議論が、橋爪、一九九六にもある)。

*

性ならびに権力についての仮説を付け加えたことで、〈言語〉に注目する社会の記述・分析は、その精度を増す。こうした仮説を、必ず付け加えなければならないわけではない、付け加える仮説が必ず性ならびに権力でなければならないというわけでもない。しかし、〈言語〉、性ならびに権力が、身体の相互関係を規定

し、社会を秩序づけているという仮説は、説明力の高い有力な理論のひとつに育ちうると考えられる。

〈言語〉・性・権力を、社会の主要な作用素と想定する理論構想を、私は、記号空間論とよんでいる。

2 言説の制度としての社会

さて、行為の集積である社会を制度化しようとする場合、言語が本質的で重要な役割を果たす。なぜなら、表現定理をある社会それ自身に適用すれば、その社会の行為連関を言語の意味連関に置き換えることができ、その社会のあるがままの像ないしあるべき像を、言語のかたちで表現できるからである。そして言語は、その実質が形式であるので、時間の経過に耐えることができ、身体に対してその外側から規範としてはたらきうるからである。

言語を行使する一つひとつの行為をふつう、言葉(言表 *énoncé*、ないし発話 *speech*)という。また、それらの集積を、言説(*discourse*)という。実際われわれの社会には、社会を像として写し取ったさまざまな言説の一群が存在する。すなわち、神話、伝承をはじめ、法、哲学、宗教、芸術、情報、科学……といった、言説の制度(*discursive institutions*)がそれである。(言説がどのように区分されて制度化されるかも、社会によって異なり、時代・文化によって異なっている。)社会学もまた、そうした言説のひとつであり、社会を科学的に記述・分析するというスタイルで社会の像を構成する。

社会を科学的に記述・分析・予測する場合に、まずすべきことは、その社会(を構成する行為連関)の構造を明らかにすることである。われわれの社会では、それは、言説によって制度化されている。そこでその社会構造が、どのような言説の制度であるかを解明することが、重要な作業プランとなるだろう。

『AERA MOOK12 社会学がわかる。』

1996. 2. 10発行 pp. 174 朝日新聞 おまけ

制度の生成3



橋爪大三郎 『言語ゲームと 社会理論』

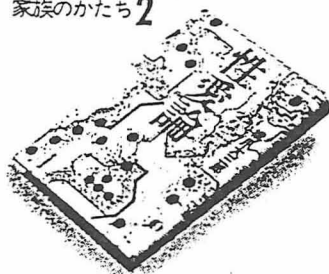
勁草書房・1985年

われわれを取り巻く世界は「言語ゲーム」の巨大な渦巻のようなものとして存在している。世界の中心をなすはずの主体の形象もその中でのみ生み出される。したがって主体が言語を掌握するのではない。むしろ逆に言語こそが主体を掌握するのだ。本書はヴィト

ゲンシュタインの「言語ゲーム」の発想に依拠しつつ、さらにはハートやルーマンの法理論を援用することで、法や権力といった社会的現象の言語的成り立ちを明らかにする。いわゆる「言語論的転回」の成果をいち早く取り入れたものとして必読の一冊である。

『AERA MOOK12 社会学がわかる。』

1996. 2. 10発行 pp. 177 朝日新聞 おまけ

性愛のかたち・
家族のかたち2

橋爪大三郎 『性愛論』

岩波書店・1995年

性愛とは自分が他者の身体を欲する現象であり、人間は他の動物よりも高度で複雑な愛のかたちを持つ。本書は、この性愛をめぐる謎に社会科学的方法で迫ろうとする試みである。そこでは「性愛の分離公理」(=性愛領域が他の社会領域から隔てられていること)を軸に、猥褻な現象するのは当該社会が性愛領域を公的領域から分離したことの帰結であること、性別はイデ

オロジーであり、家族内部の分離さえ維持されれば原則的に不要なものであること、「近親相姦の禁止」は分離公理が家族内部に写像されたことの効果であることなどが明らかにされる。さらにはフェミニズムの動きに言及する中で、性愛倫理の彼岸への方向性が模索される。「性愛そのものへの切実な感心に引き寄せられた人たち」にすすめの一冊。

* "Linguistic Sociology" by Daisaburo HASHIZUME, Aug. 1996

8巻(大修館書店)

Wittgenstein, Ludwig, 1936-1949, *Philosophische Untersuchungen (MS)*. 一九七六、藤本隆史訳『哲学探究』(全集社)
Leroi-Gourhan, Andre, 1964, *Le geste et la parole*, Editions Albin Michel. 一九七三、荒木亨訳『身ぶりと言葉』新潮社

「引用・参考文献」

橋爪大三郎、一九八五『言語ゲームと社会理論——ヴィトゲンシュタイン・ハート・ルーマン』勁草書房
橋爪大三郎、一九八六『仏教の言説戦略』勁草書房
橋爪大三郎、一九九三『橋爪大三郎コレクション——身体論』勁草書房
橋爪大三郎、一九九五『性愛論』岩波書店
橋爪大三郎、一九九六「権力の可能条件」『岩波講座現代社会学』第一六巻 岩波書店

言説についての考察は、さしあたり、つぎの課題群に整理できる。
まず、個々の言表がどのように言説に組織されるかを解明する、言説編成(discursive formation)論。これまで、レヴィ＝ストロースの神話論理(mythologique)、フーコーの知の考古学(l'archeologie de savoir)、私の宗教の言説戦略(discursive strategy)や情報の言説技術というかたちで議論されてきたが、それ以外の多くの領域に関しては手つかずのままである。それぞれの領域にそくして、言説編成のあり方を考察し、その簡明なモデルを構成する必要がある。
第二に、言説に隣接する領域において、〈言語〉と性や権力とが輻輳して、その領域独自の社会形象を生み出すことの解明。たとえば、経済領域における貨幣の生成。親族領域における血縁の生成。政治領域における権威の生成……。こうした社会を記述・分析するための基礎的な諸形象を、もっとも基本的な間身体的作用によって基礎づけることは、社会理論の見通しをきわめてよくする。そして、既存のさまざまな連字符社会学を、〈言語〉派社会学の理論的立場のもとに統合することを可能にするのである。

*